

平成31年2月28日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880293

氏名 三宅 麻未

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先: 都市名 イリノイ州、カーボンデール (国名 米国)
2. 研究課題名 (和文) : キャリア・コミュニティ形成の実践的研究 -コンフリクト中心理論を用いて-
3. 派遣期間: 平成30年8月1日 ~ 平成31年1月31日 (184日間)
4. 受入機関名・部局名: 南イリノイ大学
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究では、未だ明らかになっていないキャリア・コミュニティの形成方法とマネジメント手法について、米国と日本の組織を比較しながら明らかにすることを目的とした。研究の焦点は「コンフリクト中心理論(focal conflict theory)」とした。コンフリクト中心理論とは、グループメンバーが共有する問題やもめごと(コンフリクト)に着目し、それを題材に話し合いをすることによって、各々が抱える問題に気づき、その解決手法を考えることができるように促すことである。この分野は米国にて研究が進んでいるコミュニティ形成手法の一つである。

申請時に立案していた研究計画のうち、基礎的なスキル習得およびヒアリング調査について予定通りに終えることができた。

研究状況

- ① 基礎的スキルの習得: 受入研究室にて、コンフリクト中心理論を用いたグループ環境の作り方、言葉の掛け方、リーダーシップの取り方、ダイナミクスを活かし方など基礎的な知識を習得するとともに、キャリア選択を課題とする学生グループの指導を通して実践的手法を習得することができた。
- ② ヒアリング調査の実施: 米国に拠点を置く日本企業に派遣された日本人マネージャーに対して、グループワークでの体験と、グループワークが仕事環境やキャリア観に与えた中長期的なインパクトについてヒアリング調査を行った。企業の許可のもとヒアリング内容は録音し、KHcoderを用いて内容分析をすることができた。
- ③ 日米の比較検討の実施: 受入研究室にてDr. Kimberly Asner-Selfの指導のもと、コンフリクト中心理論を用いたグループワークが組織のコミュニティの形成にどのように作用しているか、日米の比較検討を行うことができた。グループに共通する困難を解決するプロセスを比較できたとともに、キャリア・コミュニティの構築に重要となる要素および弊害となる要素について考察することができた。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究の成果は、来年度に提出する博士論文の一部をなす。博士課程ではコンフリクト中心理論やキャリア開発論の観点から、キャリア・コミュニティの構築方法を新たに提示することを研究目的としている。

派遣中の研究から、これまで明らかにされてこなかったキャリア・コミュニティの形成とマネジメント手法について新たな視点が得られたと同時に、日本の多くの組織が抱える人間関係の問題解決の具体的手法について検討することができた。上記の研究成果の一部については、博士論文の執筆と同時に、2019年10月の経営行動科学学会にて口頭発表する予定である。

今後の研究計画の方向性については、経営学とは別の視点を持った受入研究室の教員や研究生との議論、また企業でのヒアリング調査を通して本研究の社会的意義がより一層明確なものとなったため、多様な観点から分析を進めていきたい。さらに、派遣先で出会った、類似の研究に関心を持つ仲間と、イリノイカウンセリング学会での学会発表の計画を進め、国内外のキャリア開発の新しい手法検討に貢献したいと考える。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムによって得られたものは多岐にわたるが、日本国内の研究では得られなかった経験として大きく3つにまとめられる。

①研究遂行能力の向上：コンプライアンス規定の厳しい米国において企業へのヒアリングを実施するにあたり、研究計画の提案力と様々な業務遂行力を身につけることができた。例えば、ヒアリング対象企業との交渉、法規に基づいた契約書類の作成、米国の労働法に関するトレーニングの受講、プライバシー保護のための徹底的な情報管理手法など、企業インタビューにまつわる様々な配慮とその実行スキルを体得した。

②国際的な視点の獲得：多国籍の学生からなる受入研究室の研究仲間と交流し、米国のみならず、他国のキャリア研究や心理カウンセリングの現状を知ることができた。例えばパキスタンにおけるイスラーム教員の待遇と差別の問題、レバノンにおけるLGBTQマイノリティの家族観とキャリア形成への課題など、日本でも今後課題となりうる事例と対策を通じて新しい視座を得ることができた。さらに、民族的マイノリティが多く集まるクラスにて指導を担当できたことは、他では得難い貴重な体験となった。

③国際的な人脈の形成：受入研究室における多国籍の学生との交流に加え、複数の学会に参加し様々な人脈を築くことができた。イリノイカウンセリング学会や、キャリアデベロップメント学会では、実務家による近年の問題に即した豊かなプレゼンテーションに触れるとともに、キャリア研究の第一線で活躍する研究者と交流することができ、今後の研究内容を一層深く考えるきっかけとなった。